

## 世界遺産の宝庫 ベルギー「アントワープ」 ～ルーベンスとバロック絵画について～



ピーテル・パウル・ルーベンス

アントワープは人口約 50 万人を擁するベルギー第 2 の都市です。アントワープは首都のブリュッセルから列車で約 45 分、オランダのアムステルダムからは約 90 分で行くことができます。街に近づくにつれ、ベルギーの牧歌的な田園風景から徐々に茶褐色の家が増えてきて、彼方に世界遺産「ノートル・ダム大聖堂」が見えてきます。アントワープに来たのだなと実感する瞬間です。アントワープ中央駅に到着し、列車を降りると、ここは宮殿ではないかと見紛うばかりの駅構内。ネオ・バロック様式の荘厳さに圧倒されます。中央駅から約 2 km の道のりをまっすぐに進むと、ノートル・ダム大聖堂が姿を現わします。遠くからでも華麗な大聖堂に見とれながら、フルン広場に辿り着くと、銅像がお目見えします。ベルギー最大の画家であり、バロック時代を代表する画家、ピーテル・パウル・ルーベンス（1577 年～1640 年）の銅像です。ルーベンスの生誕地はドイツですが、両親がアントワープ出身ということもあり、ルーベンスはアントワープを拠点に活動していました。そして、この銅像の背後に聳えるのが、旅の目的地、ノートル・ダム大聖堂です。



アントワープ中央駅構内



ルーベンスの銅像

◆「ノートル・ダム大聖堂」について



ノートル・ダム大聖堂

「ノートル・ダム大聖堂（別名：聖母大聖堂）」は、『ベルギーとフランスの鐘楼群<sup>しやうろう</sup>／1999年登録、2005年範囲拡大、登録基準（ii）（iv）』の構成資産として、世界遺産に登録されています。11世紀～17世紀にかけて、ベルギーのフランドル地方、ワロン地方、フランス北部の都市に、自由と繁栄の象徴として、市庁舎や聖堂に鐘楼が建てられました。ベルギーに32塔、フランスに23塔、計55塔の鐘楼群で、トランス・バウンダリー・サイト（国境を越える遺産）でもあります。ノートル・ダム大聖堂は、高さ123mのベルギー最大のゴシック建築で、アントワープを象徴する建築物。ルーベンスの最高傑作3作品が展示されています。



キリスト昇架



キリスト降架



聖母被昇天

作品名	作品概要
キリスト昇架	油彩 板 1610年頃～1611年頃 三連祭壇画 <sup>さんれんさいだんが</sup> 縦約460cm × 3つのパネル合わせて横約640cm
キリスト降架	油彩 板 1611年頃～1614年頃 三連祭壇画 縦約420cm × 3つのパネル合わせて横約620cm
聖母被昇天 <sup>ひしやうてん</sup>	油彩 板 1625年頃～1626年頃 縦約490cm × 横約330cm

※ルーベンスを知る上で、とても重要な3作品です。  
 ※三連祭壇画とは、中央と左右の3つのパネルで構成された、祭壇画のことです。  
 ※3作品とも、弟子との共同作品となります。



## ◆ルーベンスとその作品について

ルーベンスは、大成した宮廷画家として知られています。画家のみならず、外交官としてスペインに派遣され、政治の世界でも活躍しました。スペイン滞在中には、同じく宮廷画家であり外交官でもあった、スペイン人画家ディエゴ・ベラスケス（1599年～1660年）とも親交を深めました。宮廷画家には知識人が多く、政治的な素養にも長けていて、その代表格がルーベンスやベラスケスです。ルーベンスは、政治家としての仕事をこなしながら、なんと生涯で少なくとも2,000点以上の作品を遺しています。ましてや、その作品は大作が多く、どうやって制作時間を作ったのだらうと思う方もいるでしょう。ルーベンスは、アントワープで大きな工房を経営していました。

ルーベンスの作品は、画家本人だけで制作したものもあれば、工房の弟子たちとの共同作品もあり、なかなか判別が付きません。「ルーベンスの作品＝ルーベンス工房の作品」という見方もできます。大勢の優秀な弟子に恵まれたことが、これだけの数の作品を制作できた大きな要因です。弟子の中には、フランドルを代表する宮廷画家アンソニー・ヴァン・ダイク（1599年～1641年）もいました。また、『雪中の狩人』や『バベルの塔』などを描いたピーテル・ブリューゲル（1520年代～1569年頃）の子と孫にあたる、ヤン・ブリューゲル父（1658年～1625年）と同名の子（1601年～1678年）は、ルーベンスと共同で作品制作をしたことがあります。工房での共同作業は、ルーベンスの下絵をもとに、弟子が描いたり、人物を得意とする弟子が肖像画の部分を、草木を得意とする弟子が周囲の草花の部分を描いたりする、といった具合に、パーツ分けして描くこともありました。大きな工房を経営して、弟子との共同作品も多かったという点では、イタリア・ルネサンス期の画家ラファエロと共通しています。

ルーベンス作品の大きな特徴は3つあります。

1つめは、ルーベンスの作品は模写しやすいことです。色調が、この色は赤、この色は青など、明らかで表現しやすく、作家の独自性も少ないので、技法を伝授しやすい。それは、ラファエロにも当てはまります。レオナルド・ダ・ヴィンチのような、複雑な色の塗り重ねはありません。あまりにも画風や技法の独自性が強いと、弟子がその画風や技法についていけません。工房制作の場合は、これで正解なのです。

2つめは、明暗がはっきりしていて、劇的な表現の作風が多いことです。躍動的な人物描写、そして、背景を暗色にすることにより、人物を浮き立たせる作品を描いています。ルーベンスの作品は意外とシンプルで、極端な細密描写はなく、どちらかというと大胆な描き方をしています。その筆致や作品の構図の取り方なども、基本に忠実です。大胆さや、力強い筆使いなども劇的な作風を後押ししています。

3つめは、歴史画、宗教画、肖像画など題材の幅広さです。題材が多岐にわたっているのは、王侯貴族や裕福な商人からルーベンス工房への発注が多かったことの証です。

私自身は、ルーベンスの歴史画や宗教画に、少々重たい印象を持ってしまいます。

一方で、彼は、女性や子どもなどを描いた、人間的で優しい印象の作品も残しています。ルーベンスは家族や親族思いであったことでも知られていて、私にはこのような作品の方が親しみやすく、ルーベンスらしい絵だと感じます。

歴史画や宗教画は仕事＝工房作品、女性や子どもなどの肖像画はプライベート＝本人の作品、  
と云って良いのではないのでしょうか。



シュザンヌ・フルマン



クララ・セレーナ・  
ルーベンスの肖像



眠る二人の子供

## ◆バロック絵画について

バロック絵画の時代（16世紀末～18世紀初頭）は、ルネサンス絵画の次の時代にあたります。「明暗がはっきりしていて、劇的な表現の作風」が、バロック絵画の大きな特徴です。イタリアのミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ（1571年～1610年）や、オランダのレンブラント・ファン・レイン（1606年～1669年）などの作品に、多く見られます。ルーベンスは、20代の頃、約10年近くイタリアに滞在して絵の勉強をしていました。つまり、当時のイタリア絵画の技法を吸収したのです。その頃のイタリアで名声を得ていた画家が、カラヴァッジョでした。ルーベンスはカラヴァッジョより6歳年下で、実際に、彼はカラヴァッジョの作品を模写しています。ルーベンスの登場人物を浮き立たせるような、はっきりとした明暗や劇的な作風は、カラヴァッジョの影響でしょう。

バロック絵画は、“ドラマティック、劇的”とよく表現されますが、具体的にどういうことかということ、作品を観た時に、描かれた人物の動きがこれから何かをしようとするのか、はっきりと分かることです。さらに、「明暗の効果」で、その大胆な動きが強調されています。ただし、ルーベンスの作品には、カラヴァッジョほどの“リアルさ”はなく、レンブラントのような“重厚感”は感じません。それがかえって、ルーベンスに合った作風なのだと思います。

ルーベンス、ベラスケス、レンブラント、カラヴァッジョと日本でもお馴染みの4人の画家はみな、「バロック絵画の巨匠」と呼ばれています。『キリスト昇架』、『キリスト降架』、『聖母被昇天』の3作品は、典型的なバロック絵画です。登場人物に躍動感を持たせ、明暗のコントラストで主役のイエス・キリストや聖母マリアが引き立つように、演出されています。色調も、青、赤、黄の3原色と白、黒をバランス良く、配色しています。この3作品こそ、ベルギーの誇るバロック絵画の傑作なのです。

バロック時代は、オランダ、ベルギー、スペインなどの画家が活躍していました。その背景には、それまでのイタリアを中心とした地中海貿易の時代から、ヨーロッパ諸国が大西洋に進出をし始めた大航海時代へ移行したことがあります。特に、スペインやオランダでは王侯貴族が権威の象徴として、宮廷画家に肖像画などの制作を依頼しました。アントワープも貿易港として発展し、ルーベンスはネーデルラントの王侯貴族から多くの作品発注を取り付けています。西洋絵画の主流も、イタリアから徐々にオランダ、ベルギー、スペインへと移って行きました。

大航海時代が終焉<sup>しゅうえん</sup>に近づく<sup>ちか</sup>くと、繊細で優美なロココ美術に変わり、フランス絵画が開花していくことになります。このように、絵画は歴史とともに歩んでいるのです。

## ◆アントワープの世界遺産について

長い歴史の変遷の中で数多くの世界遺産を生み出したアントワープ。この街には、なんと4つも世界遺産があります。先ほどご紹介した『ベルギーとフランスの鐘楼群』は、「ノートル・ダム大聖堂」の他に、「アントワープ市庁舎」も構成資産になっています。アントワープ市庁舎は、16世紀半ばに完成した、とても美しいルネサンス様式の建物です。



アントワープ市庁舎

アントワープは貿易都市として発展し、出版・印刷の分野でも先進的な都市でした。出版業を営むクリストフ・プランタン（1520年～1589年）が16世紀半ばに開いた印刷出版工房は、その高い技術が評価され、その跡を継いだ娘婿のヤン・モレトゥスが造本技術を向上させました。彼らの印刷工房などは、2005年に『プランタン＝モレトゥスの家屋・工房・博物館とその関連施設／登録基準（ii）（iii）（iv）（vi）』として、世界遺産に登録されました。博物館の代表的な展示品には、プランタンが出版した書籍の他に、活版印刷を発明したヨハネス・グーテンベルグ（1398年頃～1468年）が出版した『聖書』、世界初の活版印刷機などがあります。プランタン一族はルーベンスとも親交があり、館内にはルーベンスが描いたプランタン家の肖像画なども展示されています。また、アントワープは、出版・印刷以外にも、ダイヤモンドの商取引が盛んに行われ、現在でもその世界的な中心地となっています。



プランタン＝モレトゥス博物館



ギエット邸

アントワープの世界遺産は、これだけにとどまらず、『ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—／2016年、登録基準（i）（ii）（vi）』の構成資産のひとつ、「ギエット邸」がアントワープの街の中心から少し離れた住宅街にあります。1927年に完成した邸宅で、フランスを中心に世界各地にある17件の構成資産のうち、ベルギー唯一の構成資産です。

アントワープは、ルーベンスゆかりの地、至るところにその足跡を見ることができます。フルン広場のルーベンスの銅像、ノートル・ダム大聖堂の3作品、そして、「ルーベンスハウス」です。ルーベンスが家族と暮らした住居兼工房で、一般公開されています。アトリエというより、貴族の館のような大きな建物です。ルーベンスの作品や、実際に作品制作に使われていた部屋など、当時の制作の様子が目に浮かびます。王侯貴族の時代を物語る作品を輩出し続けたルーベンスハウス。個人的には、ルーベンスハウスもいつか世界遺産にならないかなあ～と、密かに思っています。



ルーベンスハウスの外観と内観

見どころたくさんの世界遺産の街、そして、ルーベンスの街。  
アントワープは、とても魅力あふれる街なのです。